

平成18年度
長岡市内遺跡発掘調査報告書

2007


新潟県長岡市教育委員会

平成 18 年度
長岡市内遺跡発掘調査報告書

2007

新潟県長岡市教育委員会

例 言

- 1 本書は、長岡市内で計画された開発工事に先立って実施した試掘・確認調査のうち、平成 18 年度国庫・県費補助金の交付を受けて実施した調査の記録である。このうち、本発掘調査を実施し、本報告が刊行されるものについては、報文を本報告に掲載する。
- 2 調査は、長岡市教育委員会科学博物館が主体となって行った。
- 3 本文の執筆は、1 を駒形が担当し、その他は各調査担当者が分担して行い、編集は新田が行った。図版などの作成は一部で整理事業員の協力を得た。
- 4 遺物番号は遺跡ごとの通し番号である。
- 5 土層柱状図における  は遺物包含層を示す。
- 6 出土遺物や写真及び測量図面などの記録類は、長岡市教育委員会が保管している。
- 7 現地調査から本書の作成に至るまで、多くの方からご協力、ご教示を賜りました。記して御礼を申し上げます（五十音順・敬称略）。

小国北部地区ほ場整備推進委員会 上古志土地改良区 三条地域振興局農業振興部農地整備課
芹川町内会 帝国石油株式会社新潟鉱業所長岡鉱場 富島地区圃場整備協議会 長岡地域振興局
農林振興部農村計画課・農地整備課 中里北地区ほ場整備推進委員会 新潟県立歴史博物館
浅井勝利 安藤正美 石坂圭介 笠井洋祐 田中耕作 戸根与八郎 長澤展生 渡邊裕之

目 次

1	平成 18 年度長岡市内遺跡発掘調査の概要	1
2	寺泊潟地区試掘調査	3
3	大保・横山地区試掘調査	6
4	団内遺跡確認調査	7
5	富島地区遺跡確認調査	8
	盲田遺跡	9
	五百刈遺跡	10
	浅田遺跡	12
	古村遺跡	13
	榎町遺跡	14
6	崩遺跡確認調査	16
7	枳尾館跡確認調査	17
8	上ノ原D遺跡確認調査	18
9	来迎寺浦畑地区試掘調査	20
10	来迎寺原地区試掘調査	21
11	下ノ坪遺跡確認調査	22
12	小国北部地区試掘調査	23
13	中里北地区試掘調査	24

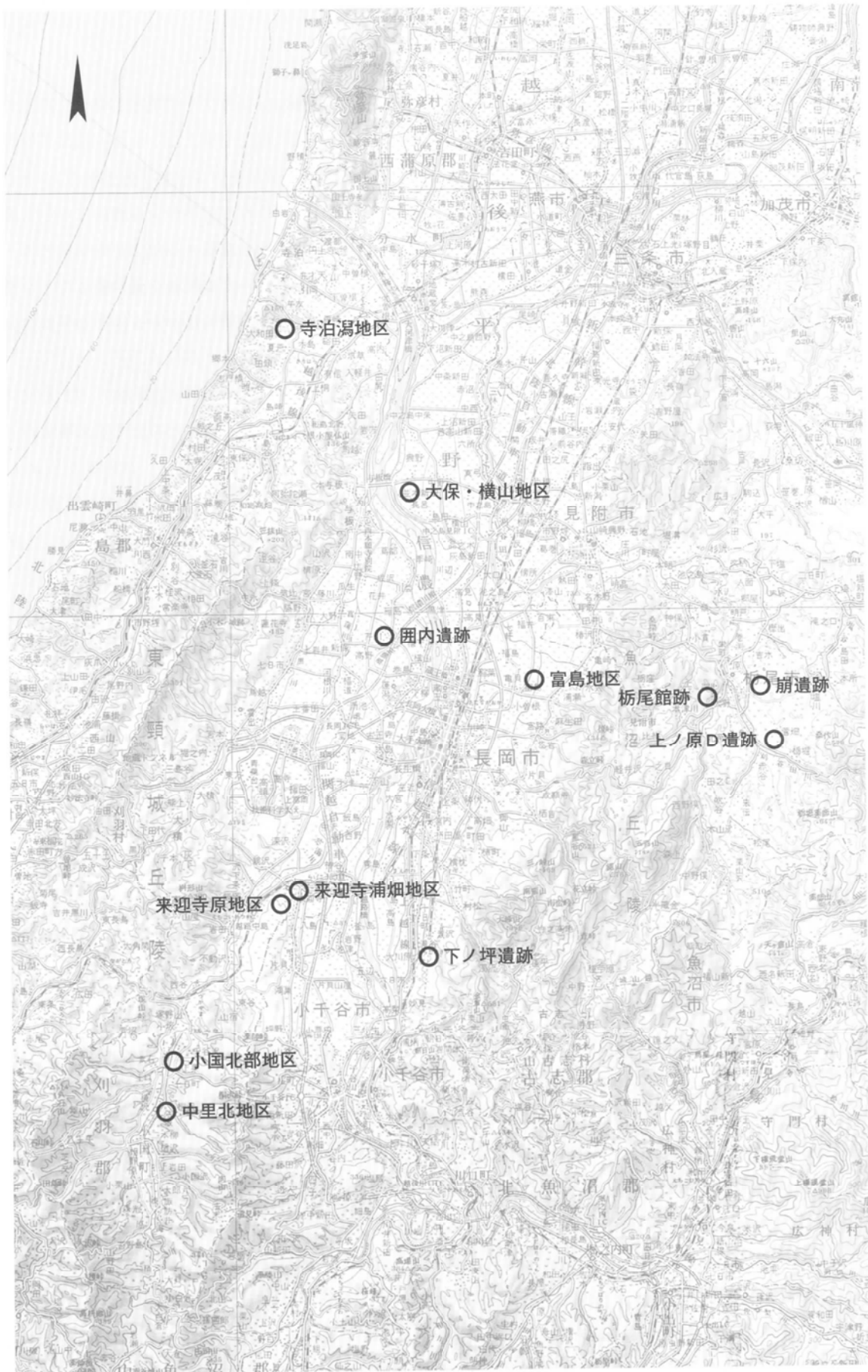
1 平成 18 年度長岡市内遺跡発掘調査の概要

市内遺跡発掘調査の目的は、ほ場整備事業などの開発計画と、遺跡の保存方法を協議する資料を得ることである。つまり、試掘・確認調査で得られた資料に基づいて、遺跡の現況を変えることなく遺跡を保存する「現状保存」、遺跡もしくは遺物包含層に一定の高さで盛土をして遺跡を保存する「盛土保存」、それに発掘調査して遺跡の情報を記録として保存する「記録保存」に、大別される遺跡の保存方法について開発主体者と協議・検討する資料の作成にある。特に、広い面積の土地の現状を変更するほ場整備事業とは、できるだけ遺物包含層の上に盛土の保護層を設ける設計をして、発掘調査の対象面積を減少することを念頭において協議を進めている。発掘調査対象面積を少なくすることは、発掘調査にかかる経費と現地における調査期間の減少につながることに。

さて、平成 18 年度に実施したほ場整備事業など、開発計画に伴う遺跡の試掘・確認調査は、12 地域に及んだ。試掘・確認調査の要因となった開発事業の内訳を見ると、ほ場整備事業などの農業関連事業が 6 地域（寺泊湯地区、大保・横山地区、富島地区、下ノ坪遺跡、小国北部地区、中里北地区）と半数を占め、昨年度と同じ傾向を示している。それ以外で試掘・確認調査の対象となった開発事業は、市道の改良に伴う調査が 3 件（囲内遺跡、崩遺跡、来迎寺浦畑地区）、携帯電話通信用鉄塔建設が 2 件（栃尾館跡、上ノ原遺跡）、送電線鉄塔建設 1 件と天然ガス関連事業 1 件（来迎寺原地区）がある。最近の傾向としては、サービスの充実強化に努めている携帯電話通信用鉄塔の建設がある。今年度、通信用鉄塔建設計画に伴って遺跡存在の有無についての照会は 10 件以上寄せられているが、現地を踏査して試掘・確認調査の必要があると認めて調査した件数（遺跡数）が上記の 2 遺跡である。

ほ場整備事業は前述のように、広い面積を対象とするだけに、遺跡の試掘・確認調査が複数年にわたることも多い。平成 18 年度に実施したほ場整備事業計画に伴う遺跡の調査でも、寺泊湯地区、中之島南部地区、富島地区、小国北部地区の 4 地域が、平成 17 年度からの継続である。そして、計画地内に周知の遺跡が複数所在したり、新たに確認した遺跡数が複数であったりすることも、ほ場整備事業計画地における特色のひとつである。例えば、寺泊湯地区では吉竹西遺跡と三反田遺跡の 2 遺跡が周知で遺跡であり、吉竹北遺跡が新たに発見された遺跡である。富島地区は盲田遺跡、五百刈遺跡、浅田遺跡、古村遺跡、それに榎町遺跡の 5 遺跡が周知の遺跡で、そのうち、盲田遺跡と五百刈遺跡それに浅田遺跡は平成 17 年度に行った確認調査の補充のための継続調査でもある。なお、富島地区で確認された 6 遺跡全体面積を対象とした発掘調査は、調査体制や、事業期間それに経費の面からも厳しいものがある。このため、現在、調査による情報は、事業主体者に伝え、調査経費と調査期間の削減につながる発掘調査の対象面積の軽減に向けた設計に取り組んでいただいている。

また、平成 18 年度に実施した遺跡の試掘・確認調査によって発見された遺跡は、送電線鉄塔新設の来迎寺原地区での立矛南遺跡と、先の寺泊湯地区の吉竹北遺跡の 2 遺跡である。立矛南遺跡は、鉄塔建設が急がれたので、試掘調査後、1 ヶ月ほどの準備期間において本発掘調査し、遺跡の情報を記録した。そのほか、すでに遺物包含層が削平されていたりして、調査で開発予定地に遺跡が確認されなかった例もある。中世の古銭が出土した下ノ坪遺跡や、縄文時代の崩遺跡、古代・中世の囲内遺跡がそれである。それに地形から未周知の遺跡が存在する可能性があるところから試掘調査を実施したけれど、中之島南部地区、小国北部地区のように、改めて遺跡が存在しないことを確認したり、中里北地区のように、遺物が出土したが、明確な遺物包含層と遺構が確認されず、遺跡と判断できなかった事例もある。



第1図 平成18年度調査位置図 (1/250,000)

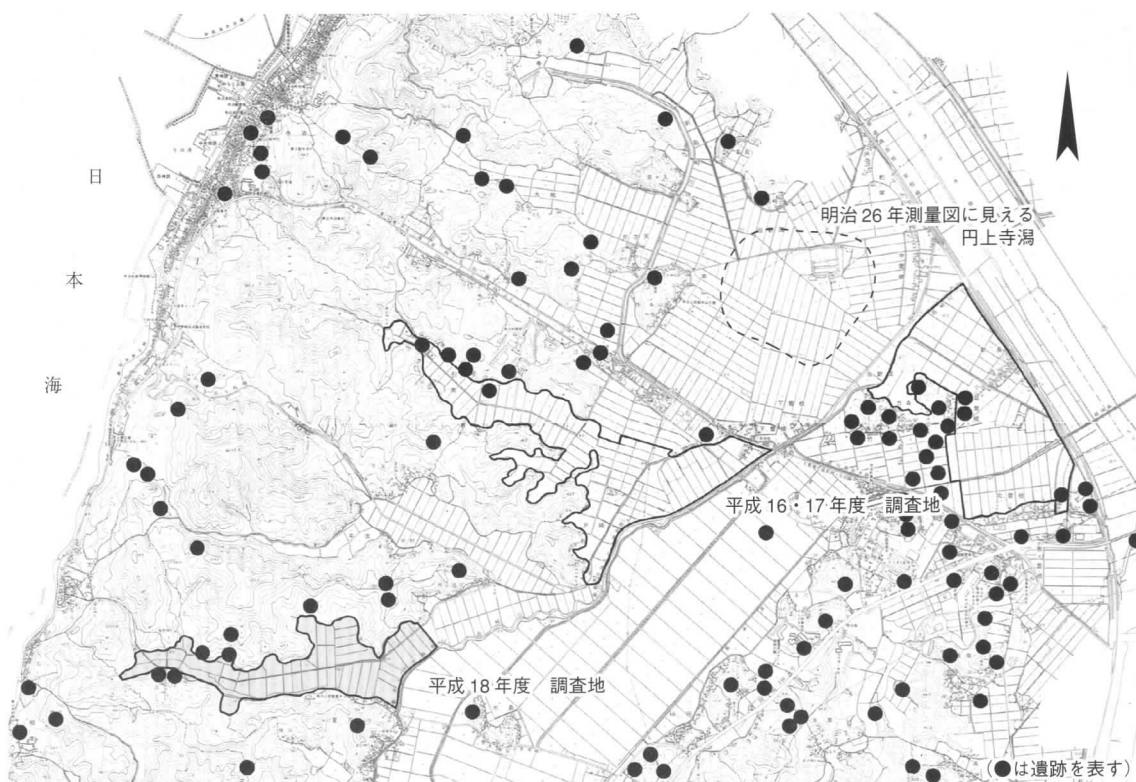
2 寺泊潟地区試掘調査

調査地	長岡市寺泊夏戸・大和田・郷本	調査面積	756 m ² (対象面積 452,000 m ²)
調査期間	平成 18 年 10 月 10 日～23 日	調査担当	加藤由美子

調査に至る経緯 新潟県が実施する経営体育成基盤整備事業（長岡市寺泊潟地区）に伴う埋蔵文化財の試掘確認調査を、平成 16 年度から実施している。総事業対象地 505ha のうち事業採択を受けた地区から順に調査を行い、平成 16・17 年度の 2 年間で 165.2ha を対象に調査を終了した。3 年目となる平成 18 年度は、夏戸・大和田・郷本の 45.2ha に対して試掘調査を行った。

調査地の概要 寺泊潟地区は東頸城丘陵の東側、信濃川大河津分水路の左岸に広がる田園地帯である（第 2 図）。地区の中央を流れる第 2 級河川島崎川が一带の用排水を担うが、排水機能が極端に乏しく、これに端を発した水争いが近世に頻発した地域でもある。近代まで島崎川下流に円上寺潟という大きな潟湖が存在し、この排水もまた久しく周辺の村の課題であった。耕地の多くは深田で、昭和 30 年代に耕地整理が行われる前までは腰まで泥に浸かりながら田植えを行ったと聞く。島崎川が改修され、円上寺潟の乾田化が実現した現在も、台風などの集中豪雨時には耕地や道路の一部が水に沈むという低地帯である。現在の集落は丘陵裾部に沿って形成され、遺跡の分布状況もそれにほぼ重なっている。周知の遺跡として、奈良・平安時代の遺物包蔵地、夏戸城跡に代表される中世の山城、時期不明の製鉄跡・塚などがある。

調査の結果 対象地に任意に 2m×3m の調査トレンチを設定し（第 3 図）、バックホウ及び人力で掘削し遺構・遺物の有無を確認した。掘削終了後、土層堆積状況などを記録し、最後に川砂を充填しながら埋め戻しを行った。調査トレンチ数は 126 箇所、実質調査面積は 756 m² である。調査の結果、周知の吉竹西遺跡及び三反田遺跡の範囲が拡大すること、新遺跡である吉竹北遺跡の存在を確認した。



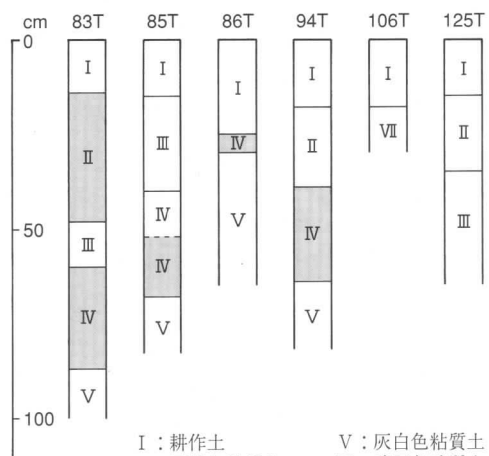
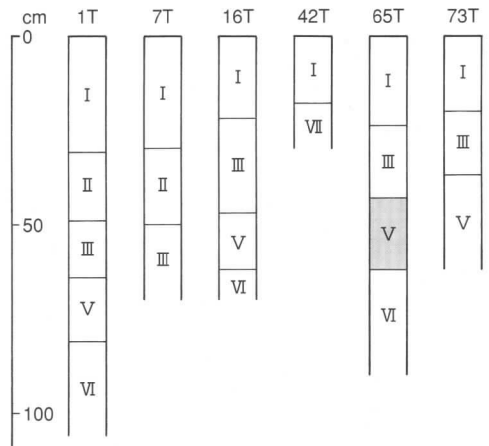
第 2 図 調査地周辺の地形と遺跡 (1/50,000)



第3図 トレンチ位置図 (1/10,000)

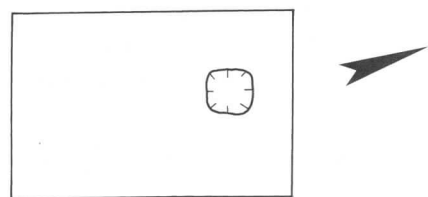


写真1 調査地遠景



- I : 耕作土
- II : 灰褐色粘質土
- III : 灰褐色砂質土
- IV : 暗灰褐色粘質土
- V : 灰白色粘質土
- VI : 暗灰色砂質土
- VII : 黒褐色腐植土

第4図 土層柱状図 (1/20)



第5図 83T平面図 (1/80)

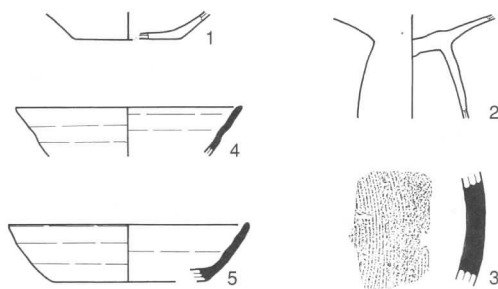
基本層序は、地点により次の3タイプに分けられる。①標高13m以上の丘陵裾部：硬質の粘質土が主体の層序（第4図：65・73・83・85・86・94・125T）。安定した地盤であることから吉竹西遺跡、吉竹北遺跡、三反田南遺跡など、大半の遺跡がここに立地する。②標高13m以下の低地部：表土直下に黒褐腐植土（ガツボ）が厚く堆積し、水はけの悪い状態が長期間続いたことが窺える（同：42・106T）。③鳥崎川近接地：砂質土と粘質土の互層からなる鳥崎川の洪水堆積層（同：1・7・16T）。

今回の調査で遺物・遺構が確認できたトレンチは、いずれも①タイプに該当する。

(1) 遺構 83T（吉竹北遺跡の範囲）で方形の土坑を1基検出した（第5図）。Ⅲ層上面から掘り込まれ、一辺約45cm、深さ約40cmである。覆土中に遺物はなく、遺構の時期や性格は不明である。

(2) 遺物 計6箇所（吉竹北遺跡から三反田南遺跡）で古墳時代から平安時代にかけての土器が出土した（第6図・第1表・写真3）。10Tから出土した土師器1点は器面の摩滅が著しいため、他所から流れてきたものと考えられる。遺物が出土したトレンチのうち、65Tは吉竹西遺跡、83・85・86Tは吉竹北遺跡、94Tは三反田南遺跡の範囲に含まれる。1は平安時代の土師器の坏である。2は古墳時代の高坏である。3は奈良時代の須恵器の横瓶、底部側面付近の破片で、外面にカキ目を施す。4・5は平安時代の須恵器の無台坏で、いずれも佐渡小泊産である。この他、106T付近の耕作土中から石器剥片、須恵器、珠洲焼など計17点を採集したが、106Tでは遺構や包含層が全く確認できないため、客土に混じって他所から搬入されたものと考えられる。

まとめ 調査の結果、吉竹西遺跡（奈良・平安）、吉竹北遺跡（古墳・平安）、三反田南遺跡（奈良・平安・中世）の3遺跡の存在を確認した。吉竹西遺跡は今回65Tで遺物が出土し、遺跡の範囲が拡大した。遺跡の本体は65Tの南側、一段高い吉竹集落側にあり、65Tの出土遺物は集落側からの流れ込みの可能性が高い。吉竹北遺跡は今回の調査で新たに発見された遺跡である。周辺の遺跡と同じく丘陵裾部に沿って立地し、今回の調査で一定量の遺物を伴うこと、遺構が存在することを確認した。三反田南遺跡も94Tで遺物が出土したことから、遺跡の範囲が拡大した。今後の経営体育成基盤整備事業にあたり、これらの3遺跡については、その取扱いについて実施計画に照らしながら随時協議を行う予定である。



第6図 遺物実測図（1/4）



写真2 発掘調査風景

トレンチ	遺跡名	層位	内容	第6図
10	—	Ⅲ層	土師器	
65	吉竹西	V層	土師器	1
83	吉竹北	Ⅱ層	土師器・須恵器	3
		Ⅳ層	土師器	2
85	吉竹北	Ⅳ層	土師器・須恵器	
86	吉竹北	Ⅳ層	須恵器	4
94	三反田南	Ⅳ層	土師器・須恵器	5

第1表 遺物出土トレンチ一覧



写真3 出土遺物

3 大保・横山地区試掘調査

調査地	長岡市横山	調査面積	396 m ² (対象面積 9,450 m ²)
調査期間	平成 18 年 6 月 5 日～8 日	調査担当	小林 徳

調査に至る経緯 平成 17 年 12 月 20 日に新潟県地域振興局農業振興部と長岡市教育委員会は県営ほ場整備事業中之島南部地区の平成 18 年度工事区域内の埋蔵文化財取扱いについて協議した。事業予定地内に周知の埋蔵文化財は存在していないが、周辺には横山権現堂遺跡や高畑遺跡、杉之森遺跡が存在することから、施工時の埋蔵文化財の不時発見を避けるため試掘調査を実施して埋蔵文化財の有無を確認することで合意した。なお、地域内を表採調査しても遺物を検出できないことから遺跡が存在しても比較的深いところに存在していると考えられた。工事において深く掘削するのが水路部分のみであるため、平成 18 年度のは場整備区域内のうち水路を計画している場所のみを調査することとなった。

遺跡の概要 調査地一帯は信濃川右岸と刈谷田川左岸に挟まれた沖積低地に立地し、信濃川の氾濫などの被害を受ける「流れ処」と呼ばれるような場所である。このような低湿地においても自然堤防や微高地が存在し、そのような土地に高畑遺跡や横山権現堂遺跡そして杉之森遺跡など弥生時代終末から中世までの遺跡が形成されていると考えられている。このような地形がどこに存在するかは過去の耕地整理で平坦化した現在では確認することが難しく、広範囲な試掘調査が必要となっている。

調査の結果 2m×3mの試掘トレンチを水路計画地上に任意に設定し、バックホウにて慎重に掘削を行った。遺物、遺構の検出時には人力により精査を行い、トレンチ完掘時には壁面の一部を清掃し、土層観察を行った。調査範囲が広いので層序は一定していなかったが、耕作土下には概ね厚い粘土層が堆積していた。また、地表面より 80cm から 90cm 付近で樹木の腐敗土層を含む地点もあり、樹林が広がっていたか、もしくは洪水等による流木が集まりやすいような地形がそこかしこに存在していたと考えられる。

全部で 66 箇所のトレンチを掘削したが、遺物の出土及び遺構の検出は見られなかった。よって、遺跡が存在する可能性は低く、事業を行うにあたっては支障がない旨を事業者に伝えた。



第7図 トレンチ配置図 (1/10,000)

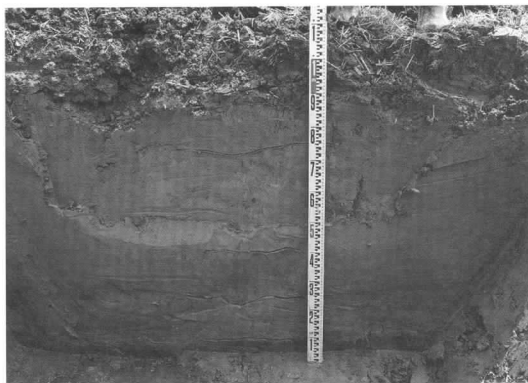


写真4 21T土層断面



写真5 調査地遠景

4 囲内遺跡確認調査

調査地	長岡市芹川町字囲内	調査面積	20.2 m ² (対象面積 1,750 m ²)
調査期間	平成 18 年 11 月 21 日	調査担当	鳥居美栄

調査に至る経緯 平成 16 年 6 月、長岡市土木部道路建設課から市道下川西 89 号線道路改良計画に伴う遺跡所在の照会があった。現地確認の際に遺物が採集できたことから、計画地には遺跡が広がると判断し、用地取得後に発掘調査を実施する予定で協議を進めていた。その後、地元住民から「当該地やその周辺は以前の耕地整理で削平・盛土を行った」という話があり、確認調査を実施することになった。

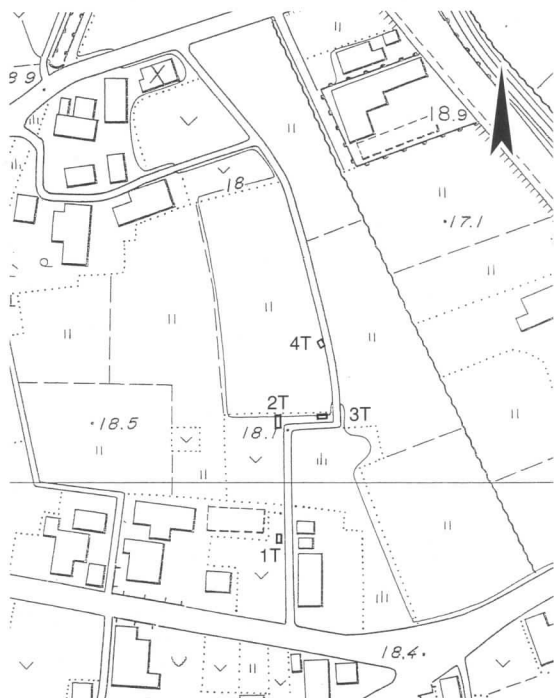
遺跡の概要 芹川町集落は南北方向に伸びる自然堤防上に営まれており、集落の北東に道満川が流れる。遺跡は集落東部の畑及び水田にあり、標高は約 18m、これまでに土師器や珠洲焼などの破片が採集されている。本遺跡の北西約 500m には戦国時代の館城とされる芹川城跡が所在する。

調査結果 道路拡幅予定地である旧耕作地に 4 箇所(1T・2T・3T・4T)の調査トレンチを設定し、バックホウで掘削を行った。

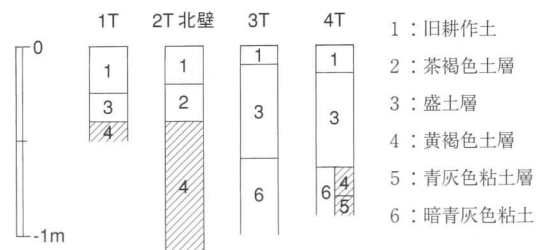
2T の北部分は削平を受けていると見られる堆積状況、2T の南部分や 1T・3T・4T では盛土が確認できた。いずれのトレンチも遺構・遺物は出土せず、遺物包含層も確認できなかった。調査対象地については遺跡が既に削平されているか、遺跡範囲が広がらないものと判断した。なお、2~4T の盛土の下、現地表から約 40~65 cm の深さで暗青灰色粘土が水路跡状に入るのを確認したが、地元住民の話などから、3T の南、現在は荒蕪地となっている箇所にあった庄屋の屋敷に伴う堀の跡と考えられる。



第 8 図 遺跡位置図 (1/20,000)



第 9 図 トレンチ配置図 (1/2,500)



第 10 図 土層柱状図 (1/40)



写真 6 完掘状況 (2T)

5 富島地区遺跡確認調査

調査に至る経緯 長岡市富島町周辺は「八丁沖」と呼ばれる低湿地帯が広がり、遺跡が存在する可能性が極めて低いと考えられてきた。平成16年春にこの地域において県営ほ場整備事業が計画されたことが長岡市農林部から長岡市教育委員会へ伝えられた。このことを受けて市教育委員会科学博物館は分布調査を行い、7箇所の遺跡を発見した。この新遺跡発見をほ場整備事業の事業者である新潟県長岡地域振興局農林振興部と市農林部に伝え、これらの遺跡が地表から浅い場所に存在することが考えられることから、平成17年度に遺跡の範囲確定をするための確認調査を行うこととなった。分布調査を行った平成16年に「7・13水害」「新潟県中越地震」が発生し、主体者との協議を行う時間が作れず当初予定時期より遅くなってしまったが、平成17年10月11日から11月4日まで確認調査を行った[長岡市教育委員会2006]。しかし、五百刈遺跡、抜間遺跡などで予想よりも大量の遺物・遺構が検出されたため、予算や気象条件などから調査を一度打ち切り、続きを平成18年度に行うことで事業主体者と協議が成立した。

遺跡の概要 平成16年度に分布調査を行い、それまで遺跡の存在の可能性が少ないと考えられてきた沖積低地上から「西八町遺跡」「盲田遺跡」「抜間遺跡」「五百刈遺跡」「浅田遺跡」「榎町遺跡」「古村遺跡」の7箇所の遺跡を発見した。これらの遺跡からは分布調査時において古代の土師器・須恵器を中心に、弥生時代後期から古墳時代前期の土器片や中世の珠洲焼片などが見つかった。平成17年度の確認調査では西八町遺跡では遺跡の痕跡を見つけることができなかったが、その他の遺跡においては漆書の須恵器など貴重な遺物が検出した。また、7・13水害時の排水状況などから調査地が周辺と比べても低位に位置しており過去に八丁沖が形成されていたが、その中でも高低差が存在していることから、一帯に現在には失われてしまった微高地がこの渦を取り囲むように存在し、その微高地上に今回検出された各遺跡のほかにも多くの中世遺跡が立地していた可能性がある[安藤2006]。

調査の経過 10月上旬に調査地近くに現場事務所を設置し、10月12日より盲田遺跡を手始めに確認調査を開始した。調査はバックホウ2台を使用し、調査員と作業員をそれぞれに配置して、平成17年度の調査では調査しきれなかった盲田遺跡、五百刈遺跡、浅田遺跡の面的な広がり確認と、着手できなかった榎町遺跡、古村遺跡の遺跡の中心地と広がり確認するため、調査許可が取れた水田を重機及び人力により2m×4mのトレンチを基本として慎重に掘削を行った。

調査終了後、この成果を基に事業主体者と協議を行い、今後の対応などを決定してゆく予定である。

参考文献

- 安藤正美 2006「上田遺跡における遺構および遺物についての再考」『新潟考古第17号』
- 長岡市教育委員会 2006『平成17年度長岡市内遺跡発掘調査報告書』



第11図 富島地区遺跡分布図 (1/20,000)

盲田遺跡

調査地 長岡市富島町字盲田 調査面積 72 m²(対象面積 13,757 m²)
 調査期間 平成 18 年 10 月 12 日～13 日 調査担当 小林 徳

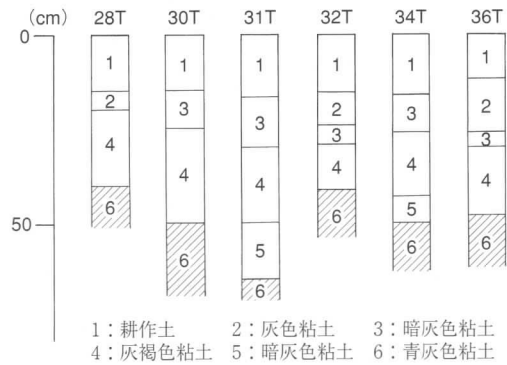
遺跡の概要 福島町集落の南東に位置し、集落が位置する自然堤防の縁辺から沖積地にかけて遺跡が立地する遺跡である。平成 17 年度の調査においては 9 世紀前半の須恵器、土師器が包含層から出土し、溝や柱穴と見られるピットを検出している。そのほかにも暗灰色粘土の包含層から土器が出土したが、ほぼ溝出土土器と同じ時期の所産と見られている。また、杭や柱の可能性のある木材も出土している。

調査結果 平成 17 年度の調査においては調査許可を得ることができた範囲では遺跡の北端を決めることはできなかった。よって、今回調査においては昨年度の 13T・15T の北側を調査することとし、該当地の水田の所有者より掘削の許可を得た。この許可を得た範囲内に 9 箇所の特レンチを任意に設定し、バックホウにて調査を行った。基本層序は、耕作土の下に灰色粘土もしくは暗灰色粘土が堆積し、この暗灰色粘土が昨年度調査での遺物包含層と考えられる。包含層の下に灰褐色粘土層と暗灰色粘土層が堆積し、地山層と見られる青灰色の粘土もしくはシルトからなる層が堆積していた。調査の結果、遺物の出土や遺構の検出があった特レンチはなかった。

まとめ 今回の調査にて遺跡の痕跡は確認できず、盲田遺跡は昨年度調査にて確定した遺跡範囲より北側には遺跡が広がらないと思われる。昨年の調査結果も考慮して、ほ場整備における遺跡保存もしくは調査をどのようにして行うかを事業者と協議していきたい。



第 12 図 トレンチ配置図 (1/5,000)



第 13 図 土層柱状図 (1/20)



写真 7 土層断面 (29T)

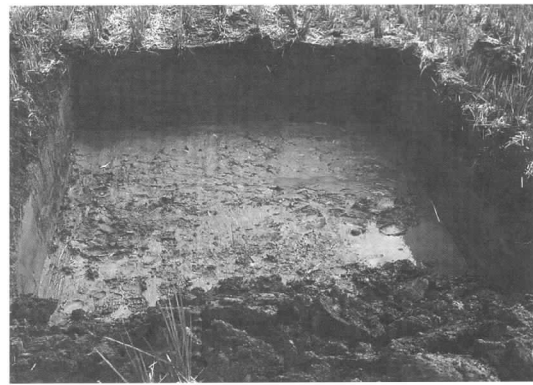


写真 8 完掘状況 (33T)

五百刈遺跡

調査地	長岡市富島町	調査面積	320 m ² (対象面積 834,972 m ²)
調査期間	平成 18 年 6 月 20 日～24 日	調査担当	小林 徳

遺跡の概要 五百刈遺跡は平成 17 年度の確認調査において、溝状遺構・井戸状遺構・土坑など多数の遺構を検出し、遺物として木製品のほかに法仏式～月影式に対比できる弥生土器と佐渡小泊窯産の須恵器を始め 9 世紀前半～10 世紀初頭の土器が出土している。また、「南」と読める墨書土器や「王」とも「山」とも読める漆書きのある須恵器が出土している。遺跡の範囲確定を行うことにより、八丁沖とその周辺にあった微高地の遷移や遺跡状況の解明が期待された。

調査の結果 (1)遺構 溝状遺構や土坑、ピット及び不定形の落込み状遺構を検出した。50T で検出された溝や 51T での土坑、77T での落込み状遺構はいずれも平安時代の土器が出土している。

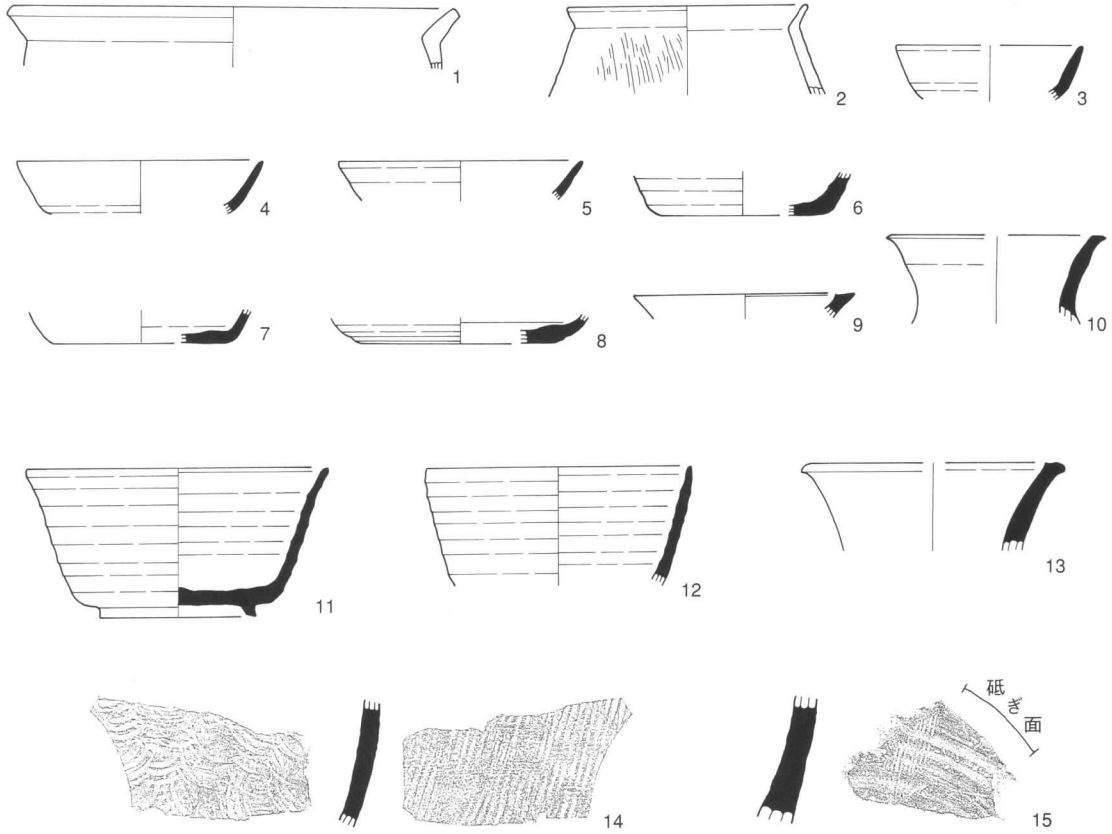
(2)遺物 1 は土師器の甕。内外面共にナデ調整を施す。2 も土師器の甕で、口縁端部に面を持たず丸く仕上げ、胴部は緩やかに開き縦位のハケ目を施す。内面にも一部ハケ目調整が見られるが、器壁が荒れているため判然としなかった。3 から 8 は須恵器の坏で、4・5・8 は佐渡小泊窯産と見られる。4 は下部がケズリ調整され、8 にも丁寧なケズリがみられる。どちらの坏も 9 世紀前半のもので、4 や 6 の坏も同時代のものと見られる。9 は横瓶の口縁端部で、口縁の外面の一部以外には自然釉がかかっている。10 は須恵器大甕の頸部から口縁部にかけての破片。外面の色調は赤褐色となっている。破片が小さかったため正確な口径を出すことはできなかった。11 と 12 は有台坏。共に佐渡小泊窯産で 11 は口縁端部にて小さく外反している。しっかりとした高台部の造りから 9 世紀前半のものとみられる。13 は須恵器大甕の口縁部。11 と同じく口径を出すことはできなかった。14 は須恵器横瓶の胴部と見られる。縦位の平行タタキと同心円状の当て具を使用している。15 は鉢の胴部片だが、破損した後に割れ口を砥石の代用品として使用した痕跡が見られる。13 は 72T、15 は 77T の出土で、他は 51T にて出土している。

まとめ 今回の調査にて、昨年調査できなかった地域を確認できた。結果、西側に遺跡の範囲が広がることがわかった。73T から 85T では落込み状遺構やピットなどが検出されたが、遺構に伴う遺物は少なく時代を特定することはできなかった。また、出土した遺物の数も散見される程度であるため、流れ込みなどの可能性もあり今後遺物の確認等が必要となろう。

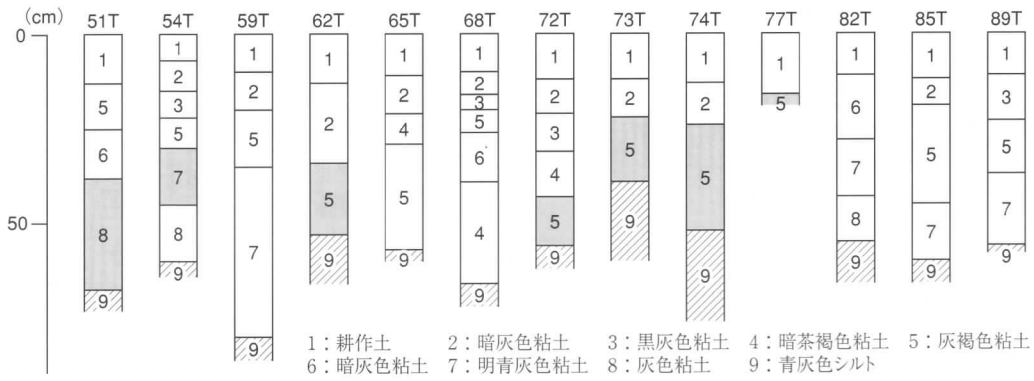
その他の方向にはそれほど大きく広がらない可能性が出てきた。昨年の調査結果と重ね合わせ、浅田遺跡・榎町遺跡との関係を考慮し、遺跡範囲を決定して事業者と協議していく予定である。



第 14 図 トレンチ配置図 (1/10,000)



第15図 出土遺物 (1/4)



第16図 土層柱状図 (1/20)



写真9 遺物出土状況 (51T)



写真10 土坑検出 (51T)



写真11 落込み状遺構 (77T)

浅田遺跡

調査地 長岡市富島町字浅田 調査面積 56 m²(対象面積 12,677 m²)
 調査期間 平成 18 年 10 月 17 日～18 日 調査担当 小林 徳

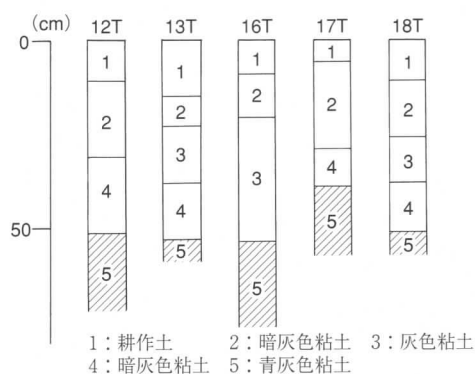
遺跡の概要 猿橋川の左岸、宮下工業団地から約 150m 北方に位置する。一部畑となっているが、ほとんどが水田となっている。平成 17 年度の調査では弥生時代後期の土器とともに、緑色凝灰岩の剥片や時期・用途不明の木製品が出土した。また、加工痕を持つ木杭が 2 本出土しており、明確な掘り込みなどは検出されなかったが、何らかの遺構となる可能性がある。

調査の結果 平成 17 年度の調査において 10T を中心に弥生時代後期の遺物が出土している。また、5T においては、表面に彫り込みを持ちその両脇に唐草文が描かれる用途不明の木製品が出土している。今回の調査においては、調査許可の取れた南側を調査し、遺跡の広がりを確認することとした。7 箇所のトレンチを任意に設定し、バックホウにて掘削をした。基本層序は、昨年の調査結果とほぼ同じであった。調査の結果、すべてのトレンチにて遺構や遺物を検出することはなかった。

まとめ 浅田遺跡が南側に広がる可能性が低いことがわかった。なお、浅田遺跡は榎町遺跡や五百刈遺跡と隣接しており、今回の調査でもどの範囲までを浅田遺跡とするかという問題が残っている。特に、今年度の五百刈遺跡での調査では、量は少ないものの古代から中世にかけての遺物やピットなどの遺構が浅田遺跡に程近い地点からも検出している。これらを仮称的に「五百刈遺跡」としたが、この地点を浅田遺跡の範囲とするか、それとも別の遺跡とするかなども含め、慎重に検討していきたい。



第 17 図 トレンチ配置図 (1/5,000)



第 18 図 土層柱状図 (1/20)



写真 12 土層断面 (15T)



写真 13 トレンチ完掘 (15T)

古村遺跡

調査地	長岡市富島町字古村	調査面積	216 m ² (対象面積 60,100 m ²)
調査期間	平成 18 年 10 月 18 日～19 日	調査担当	丸山一昭

遺跡の概要 調査地は猿橋川左岸、富島町の集落北側水田に位置する。遺跡の南側には富島集落が立地する標高 18.5m 前後の微高地が存在し、北側に向かって徐々に標高は低くなっている。調査区東側の畑・水路から、古代の須恵器や近世陶磁器などが表面採集されている。

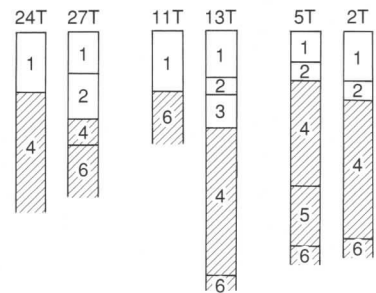
調査の結果 2m×4mの調査トレンチを 27 箇所設定し、バックホウによる掘削を行った。遺物包含層と捉えられる箇所は部分的で、古代・近世の遺物が僅かに出土した。調査区西側では耕作土直下のピットや落込み状の遺構を検出した。20Tのピットは近世磁器片を出土しており江戸時代以降の遺構と考えられる。いずれも覆土はしまりの弱い灰色粘土の単層であることから同時期の可能性が高い。

出土遺物 4Tおよび5Tから須恵器片が5点出土している。1は横瓶の胴部閉塞部付近で外面にはカキ目が見られる。2～5は甕で外面平行タタキ・カキ目、内面同心円文の当て具痕が観察できる。3～5はス・タール状の付着物が見られる。焼成は良好でやや硬質である。

まとめ 今回の調査では平安時代の遺物が出土しているが、これらに伴う遺構は確認されなかった。また、集落側に近いトレンチは後世の削平を受けた可能性が高く、遺跡は西側へは広がらないようである。

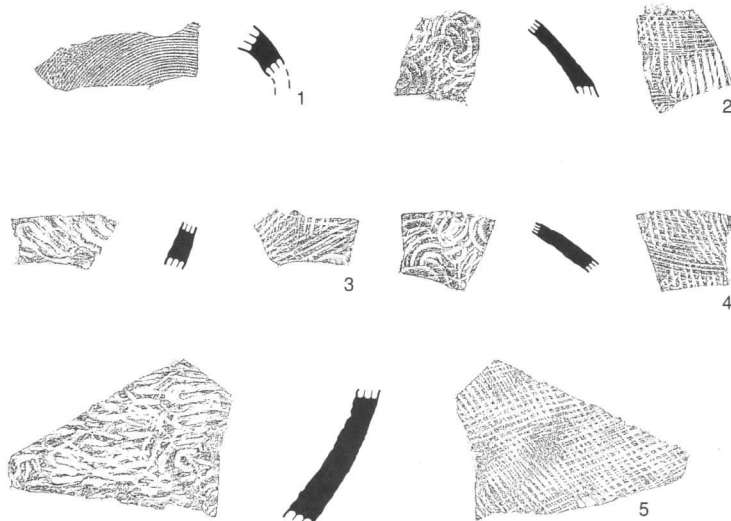


第19図 トレンチ配置図 (1/5,000)



1：水田耕作土
2：暗灰色粘土
3：灰色粘土（炭粒含む）
4：灰褐色粘土
5：緑灰色粘土
6：青灰色粘土

第20図 土層柱状図 (1/20)



第21図 遺物実測図 (1/40)



写真14 4T完掘状況



写真15 25T遺構検出状況

榎町遺跡

調査地	長岡市宮下町字榎町	調査面積	80 m ² (対象面積 22,340 m ²)
調査期間	平成 18 年 10 月 18 日	調査担当	丸山一昭

遺跡の概要 調査地は猿橋川左岸、富島町の集落東側水田に位置する。遺跡の西側には富島集落が立地する標高 18.5m 前後の微高地が存在し、調査区の標高は 17.1m 程度となっている。

調査の結果 2m×4m の調査トレンチを 10 箇所設定し、バックホウによる掘削を行った。7T では耕作土直下に青灰色粘土の地山が存在する。後世の削平により遺物包含層は既に無かったが、溝状遺構が比較的良好に残存した。4T の土層断面ではピット状の落込みが確認された。落込みの上層には炭粒を含む暗灰色粘土が存在し、削平の影響はみられなかった。

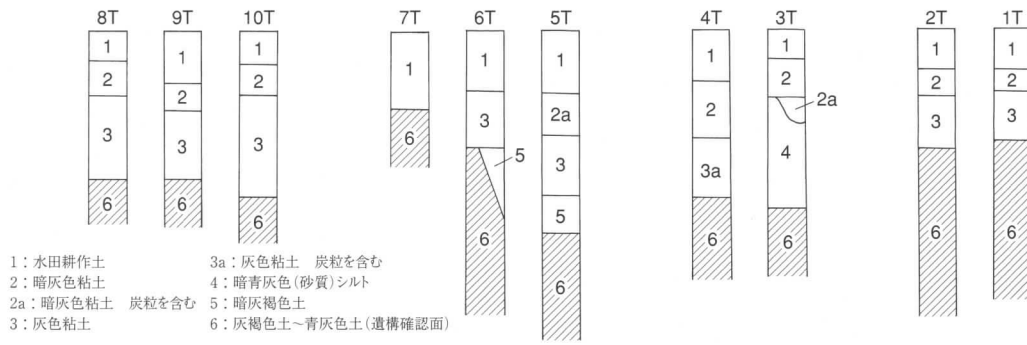
(1) **遺構** 7T で溝の一部分と見られる遺構が検出された。溝は南北方向に伸び、上幅約 50cm、深さ約 32cm、断面 U 字形を呈する。落込み際は緩やかに広がりわずかに平坦部を形成する。覆土は粘土層を基本に、下層で植物遺体、中層で粉状の炭層を包含する。中層の東側壁面付近では土師器甕の底部 (2) が出土した。溝が埋没する過程で流れ込んだものと見られるが一点のみの出土であり詳細は不明である。

(2) **遺物** 1 は平安時代のロクロ成形の鍋口縁部で端部は面取りされ上方に摘み上げられる。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好である。2 は奈良時代の甕底部で平底となるものである。底部の調整は外面が縦方向のケズリ、内面は回転台によるカキ目状の条痕を残す。外面にはススが付着している。底径 7.4cm、胎土には海綿骨針・砂粒をやや多く含み焼成は良好である。

まとめ 遺跡発見時の表面採集では弥生・古墳・古代・中世の遺物が発見されたが、今回の調査では古代の遺物のみ確認された。時代を特定できる遺構は 7T の古代の溝 1 条であり遺物の出土も少量であった。このことから、調査区は遺跡の北端にあたりその中心は南側に存在する可能性も考えられる。



第 22 図 トレンチ配置図 (1/5,000)



第23図 土層柱状図 (1/20)



第24図 遺物実測図 (1/4)

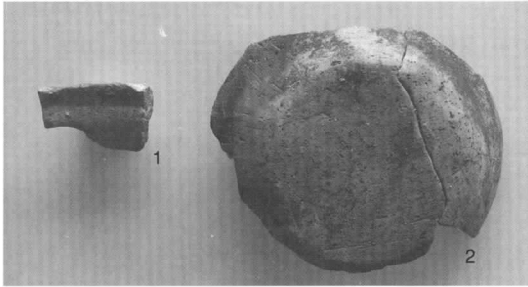
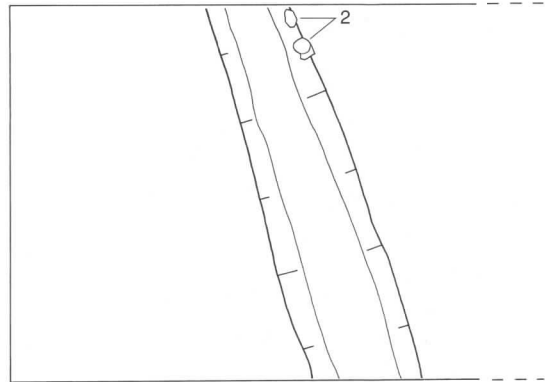


写真16 出土遺物



第25図 7T遺構平面略図 (1/40)



写真17 4T土層断面



写真18 5T土層断面



写真19 7T溝検出状況



写真20 7T溝土層断面

6 崩遺跡確認調査

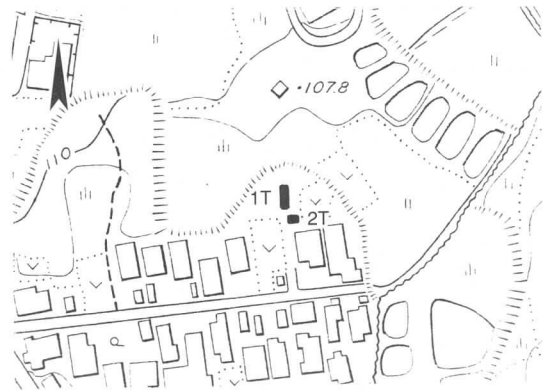
調査地	長岡市金沢字崩	調査面積	16.5 m ² (対象面積 400 m ²)
調査期間	平成 18 年 7 月 5 日	調査担当	小林 徳

調査に至る経緯 栃尾市建設課と栃尾市教育委員会とは市道建設について予定地内に存在する崩遺跡の取扱いについて協議を重ね、新潟県教育委員会の助言を得て施工時には確認調査を行う計画を立てた。平成 17 年 1 月 1 日に栃尾市は和島村・与板町・寺泊町と共に長岡市と合併し、確認調査についても長岡市教育委員会に引き継がれた。平成 18 年度になり長岡市栃尾支所建設課から市道建設を実施するとの連絡が長岡市教育委員会に入り、再度詳細な協議を行い遺跡の有無を確認するための確認調査を行い、適切な処置をした後に施工することで合意した。

遺跡の概要 栃尾盆地中央を流れる刈谷田川右岸の河岸段丘上に存在し、現在は宅地に囲まれた畑となっている。同様に刈谷田川右岸の段丘には十三塚遺跡が立地し、また段丘から低地にかけては金沢A遺跡、金沢B遺跡が存在するなど縄文時代中期から後期にかけての遺跡があるが、本格的な調査の例は少なく当時の様相を知ることが困難になっている。

崩遺跡からは少量の土器片と打製石斧などが表採され、これらの遺物から縄文時代後期の遺物包蔵地として認識されている。正確な記録はないが現地には小高い山があったものを宅地にするために切り開いたため、遺跡が煙滅したとも言われている。

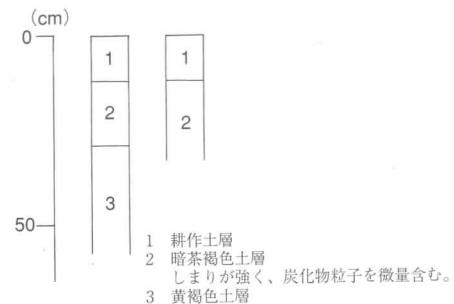
調査結果 市道建設地内に任意に 1.5m×8m、1.5m×3m の 2 本のトレンチを設定し、重機にて慎重に掘削をした。1T では約 10cm の耕作土層の下に包含層と見られる暗茶褐色土層と地山層の黄褐色土層が堆積しているが、遺物・遺構の検出はなかった。2T においては耕作土直下に地山層が検出された。よって、事業者である長岡市栃尾支所建設課に調査の結果、事業に支障はない。当該地にあった崩遺跡は宅地造成のため既に煙滅しているとも言われている。しかし一部に遺物・遺構が残存していることもあるので、工事中に遺構・遺物が検出される可能性も考慮し慎重に工事を行い、遺跡が見つかった時点で早急に教育委員会に連絡をするよう伝えた。



第 26 図 トレンチ配置図 (1/2,500)



写真 21 1T 層序



第 27 図 土層柱状図 (1/20)

7 栃尾館跡確認調査

調査地	長岡市大野町字城久保	調査面積	2 m ² (対象面積 2 m ²)
調査期間	平成 18 年 7 月 5 日	調査担当	小林 徳

調査に至る経緯 平成 17 年度に東日本システム建設株式会社より携帯電話電波塔の建設が栃尾館跡範囲内にて計画され、遺跡の取扱いについて長岡市教育委員会と協議が行われた。当初、掘削範囲が狭いことから工事立会いを行い遺跡の確認をすることも考えられたが、栃尾館跡が栃尾城跡の付属施設として新潟県指定文化財(史跡)に指定されていることから、新潟県教育委員会と長岡市教育委員会は取扱いに関して協議を重ねた結果、掘削調査を行い館跡の痕跡の有無を確認する必要があるとの回答を得たため、事業者にも協力を仰ぎ調査を行った。

遺跡の概要 栃尾館跡はその創始が南北朝時代とも室町時代初期とも言われている。栃尾城の南麓「根小屋地区」に存在した館で、土地更正図などから勘案するに方形をしていたと考えられている。土塁や濠で囲まれた内郭に館があり、この館を取り囲むように家臣団の屋敷群が存在して、さらにその外周を濠・切崖などで強固に防衛されていたと言われている。この栃尾館も天正 8(1580)年の「御館の乱」において栃尾城が陥落する数日前に「早天、根小屋へ押寄せ放火せしめ、巢城ばかりに成置き候」との記述があり、戦火により館周辺のみならず、家臣団の屋敷群なども完全に消失したと考えられている。それまで栃尾城将であった古志長尾氏に代わり御館の乱に勝利した上杉景勝により栃尾城に城将が置かれ、上杉氏の会津移転の後にも代官などが置かれたが、それに伴い館の再建などが行われたという伝承などは伝わっておらず、その正確な位置はやがて忘れられていった。

1950 年に栃尾城跡を構成する遺跡の一部として新潟県指定文化財に指定され、1989 年から 1994 年まで栃尾市教育委員会により 5 次にわたる確認調査を行った。しかし、中世の館跡と考えられる痕跡は検出されておらず、未だその全貌はわかっていない[栃尾市教育委員会 1995]。

調査結果 今回の調査にあたり、携帯電話電波塔施工に必要な掘削範囲に 1.5m×1.5m のトレンチをバックホウにて掘削し調査を行った。層序は 15 cm ほど宅地化したときの盛土が見られ、その下に 20 cm ほどの黒褐色土と黄褐色土が堆積していた。これらは、過去の調査においてそれぞれⅢ層、Ⅳ層と呼ばれていたものとみられる。調査地点からは遺構・遺物ともに検出されなかった。よって事業者にも工事は支障がないが慎重に工事を行うよう旨を伝え、調査を終えた。

参考文献 栃尾市教育委員会 1995『栃尾城跡(館跡)緊急調査報告書』



第 28 図 トレンチ配置図



写真 22 調査地遠景

8 上ノ原D遺跡確認調査

調査地	長岡市大川戸	調査面積	24.2 m ² (対象面積 100 m ²)
調査期間	平成 18 年 5 月 17 日	調査担当	新田康則

調査に至る経緯 平成 17 年 10 月、栃尾市教育委員会に対し、周知の上ノ原D遺跡における携帯電話通信用鉄塔建設工事に係る埋蔵文化財の取扱いについて、問い合わせがあった。平成 18 年 1 月の市町村合併に伴い長岡市教育委員会が協議を引き継ぎ、協議の結果、調査対象面積を開発面積と同じ約 600 m²とした。しかし、4 月 10 日付けで事業者から提出された実施設計と、現地の状況を照らし合わせ、鉄塔基礎建設部分 100 m²を調査対象とすることとなった。

調査地の概要 調査地は刈谷田川右岸の河岸段丘上に位置する。同じ段丘面上には上ノ原A・B・C遺跡(後期)、菅畑野田遺跡(中期)、大川戸東遺跡(晩期)など、縄文時代の遺跡がまとまって分布している。今回調査対象となった上ノ原D遺跡も縄文時代中・後期の遺跡として周知化されていた。

調査の結果 調査範囲は黄褐色風化火山灰土層まで削平を受けており遺物包含層は残っていなかった。

1Tでは土坑 1 基を検出した。また、黄褐色風化火山灰層の掘削過程で礫がまとまって出土した。記録写真を撮影した後に切り割ったところ、下層の礫が部分的に隆起したものであることが判明した。

2Tは当初 1.6×4mの設定であったが、遺構、そして赤褐色土粒を多量に混入する土層の広がりを検出したため、トレンチを拡幅して調査を進めた。結果として土坑 10 基を検出した。

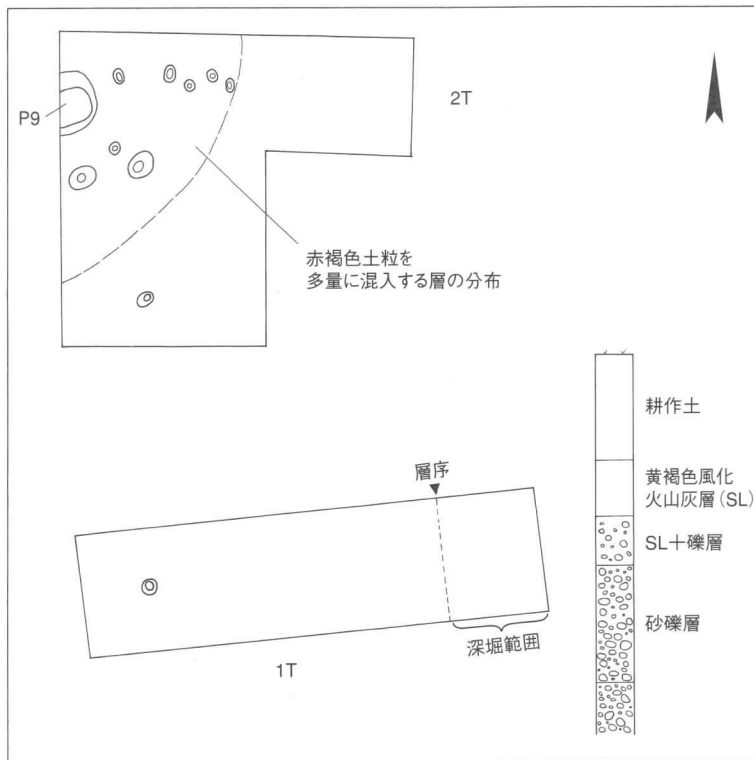
このうち、西壁にかかって検出された 2T-P9 は、平面が略方形、断面が台形状を呈する土坑である。覆土(暗茶褐色土層)に礫(φ約 15~40 cm)を含んでいた。この土坑の覆土からは縄文土器片が 2 点出土している。1 は遺構確認段階で出土した。器表面をヘラナデ調整した無文地に結節縄文(R)で綾絡文を施している。晩期中葉の粗製深鉢土器の口縁部~胴部付近の資料であろう。2 は遺構底面に近い位置、覆土に含まれた大量の大形礫を取り除いた後に出土した土器である。精製壺形土器の頸部~体部上半の資料であろう。結節縄文(LR)による綾絡文と斜縄文を地文とし、その上に半截竹管状工具で沈線が施される。綾絡文は 2 段確認され、非常に細い縄文原体が使用されているのが特徴である。沈線文については文様の全容が判然としない。頸部区画には断面三角形の突帯を貼付し、それを棒状工具で一定間隔の強弱をつけながら押し潰している。連続する楕円文を表現しているのだろう。突帯の上下端は半截竹管状工具で調整されており、特に下端については沈線化している。また、器表面には赤彩の痕跡があり、そして内面調整も丁寧である。晩期中葉の資料と思われるが、器形・文様構成、施文手法のいずれについても検討の余地が大きい。

また、2Tで検出した赤褐色土粒を多量に混入する土層は第 図に示したような広がりをもつ。また、土層の観察からは各土坑の最終堆積土層であると言える。しかし、この土層の成因は不明である。

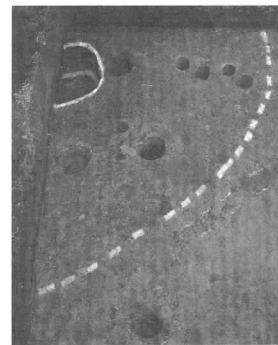
調査対象区域のうち、遺跡が残存する範囲については発掘調査を行い記録保存した。このため、開発事業に対しては埋蔵文化財保護行政上の更なる措置は必要ないものと判断したが、慎重工事を実施するよう事業者に要望した。



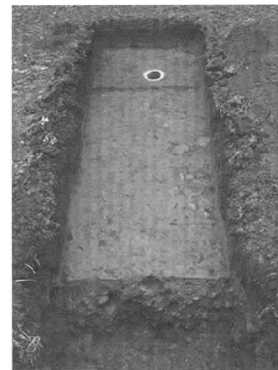
第 29 図 調査地位置図 (1/10,000)



トレンチ配置図 (1/100 土層柱状図は 1/20)

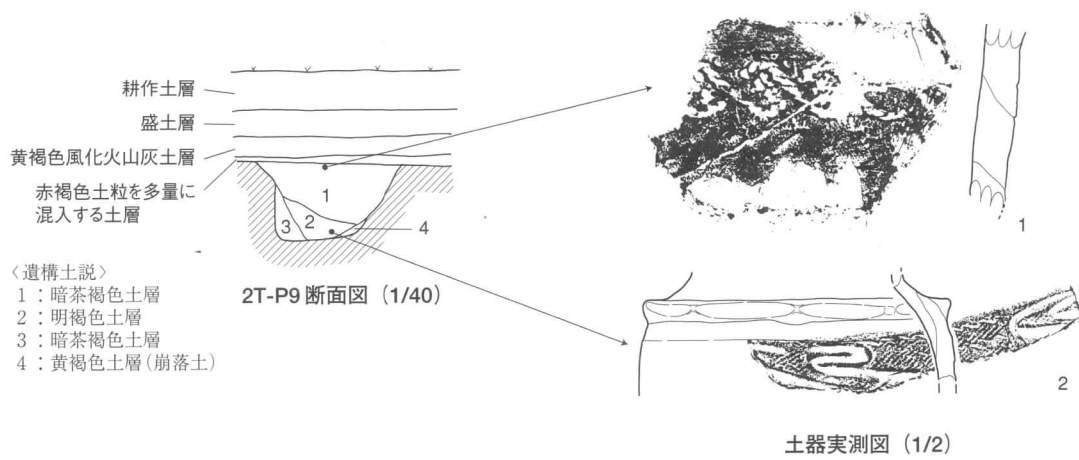


2T 完掘



1T 完掘

第 30 図 調査状況



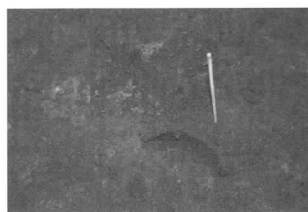
- 〈遺構土説〉
 1：暗茶褐色土層
 2：明褐色土層
 3：暗茶褐色土層
 4：黄褐色土層(崩落土)

2T-P9 断面図 (1/40)

土器実測図 (1/2)



礫出土状況



土器出土状況



土器写真 (部分)

第 31 図 2T-P9 遺構と遺物

9 来迎寺浦畑地区試掘調査

調査地	長岡市朝日字来迎寺前	調査面積	24 m ² (対象面積 1,752 m ²)
調査期間	平成 18 年 10 月 4 日	調査担当	新田康則

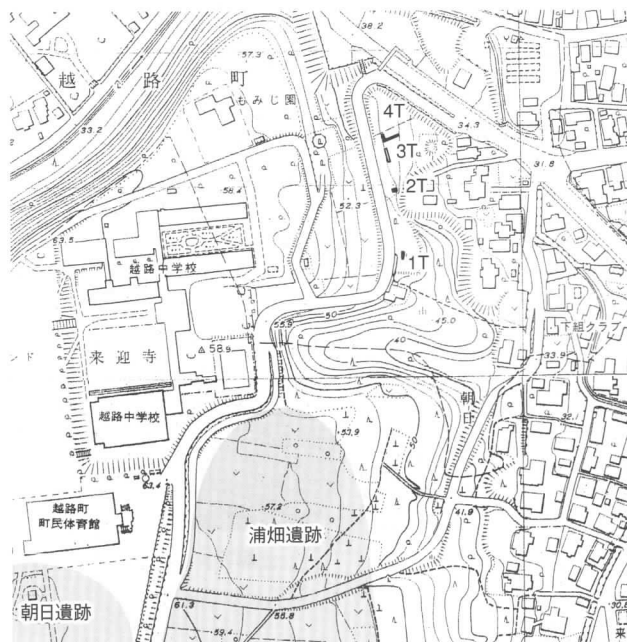
調査に至る経緯 調査は市道越路 366 号線道路改良工事に伴い実施された。市道越路 445 号線 (旧町道 366 号ほか) 及び墓地公園整備事業に伴う埋蔵文化財の取扱い協議は平成 14 年度より開始され、平成 15 年から 2 ヶ年度で試掘調査を実施する計画であった。平成 15 年度は開発面積約 48,000 m² に対し 1,230 m² の調査を実施して、浦畑遺跡 (縄文晩期中葉・古代・中世) を新発見した。平成 16 年度は調査対象面積 35,000 m² を計画していたが、開発事業が遅延したことに伴い調査も延期された。その後、震災復旧や、市町村合併に伴う全体事業計画の見直しなどの影響で事業は停滞したが、今年度、約 30,000 m² を対象に試掘調査を実施することが決定した。その後も、道路法線について、より遺跡包蔵の可能性が低いと推測される場所を通るよう協議を続けた。最終的に計画法線がやや西よりに設計されたため、開発面積約 6,100 m²、調査対象面積 3,000 m² とし、土地所有者の承諾を得た 1,752 m² について調査を実施した。

なお対象地の縮小により、調査地が来迎寺字浦畑地籍を外れ、朝日字来迎寺前地籍のみとなったため、法 98 条などの行政文書では「来迎寺原地区」として取り扱っている。

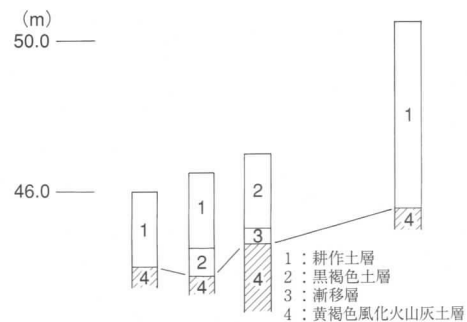
調査地の概要 調査地は越路原Ⅲ段丘面の北東縁に位置している。調査地の南西、越路原Ⅲ段丘面には朝日遺跡 (縄文時代晩期)、朝日遺跡の東側の緩斜面地が位置している。

調査の結果 4箇所でのトレンチ調査の結果、2Tと4Tにおいて少量の遺物を確認した。しかし、残念ながら遺構を検出することはできなかった。4Tからはロクロ成形の土師器片が出土した。長甕の体部資料である。胎土は砂粒が少なく粉っぽい印象を受ける。9世紀後半から10世紀後半に位置づけられる資料であろう。その他、2Tからは焼土塊1点と黒色安山岩の碎片が1点出土している。

今回の調査で出土した遺物は、調査地の旧地形が比較的急な斜面地であることから、西側の平坦面 (越路原Ⅲ段丘面?) から流れ込んだものと推測された。したがって、開発工事は特に問題ないと判断した。



第32図 調査地位置図 (1/5,000)



第33図 土層柱状図 (1/40)

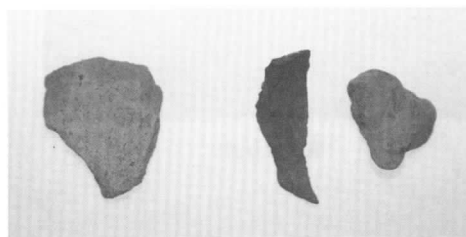


写真23 出土遺物

10 来迎寺原地区試掘調査

調査地 長岡市来迎寺原 調査面積 84 m² (対象面積 9,387 m²)
 調査期間 平成 18 年 4 月 18～5 月 10 日・10 月 5 日 調査担当 新田康則

調査に至る経緯 来迎寺原地区における試掘調査は、東北電力株式会社による特別高圧送電線鉄塔建設に伴う事業と帝国石油株式会社による天然ガス井基地建設工事に伴う事業であった。前者については、その後本調査実施に至ったため、調査内容の報告は本報告で併せて行い、ここでは後者について報告する。

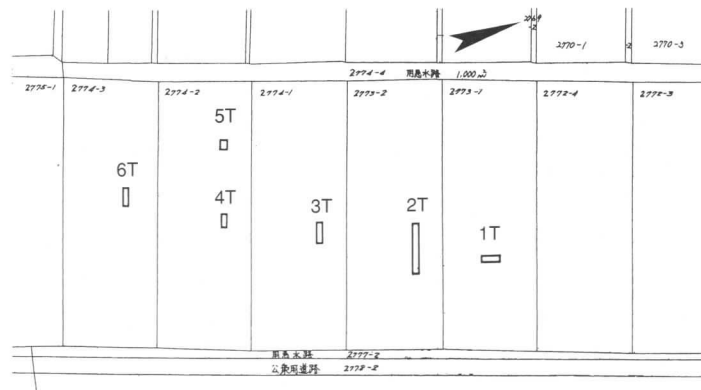
この天然ガス井基地建設工事計画については、平成 17 年度末から取扱い協議を始めた。数箇所あった候補地はいずれも周知の遺跡には該当しないが、周辺には縄文時代を主体とする遺跡が分布する。事業者からは、急増する天然ガス需要に対応するために事業の緊急性が高く、事業地の選定に際しては埋蔵文化財包蔵の可能性が低いことという条件も考慮したいという要望があった。この要望は埋蔵文化財保護の立場に合致するものであるため、周辺地域における過去の調査記録等を検討し、検討結果を事業者に伝えた。

調査地の概要 調査地は越路原 I 段丘の中央に位置する。昭和 40 年代の土地改良事業の影響で地形が改変されており、旧地形の景観は失われている。しかし、現況の水田形状等から、段丘北端から段丘中央に向かい深く貫入する谷の谷頭付近（傾斜地）であったことが想起される。

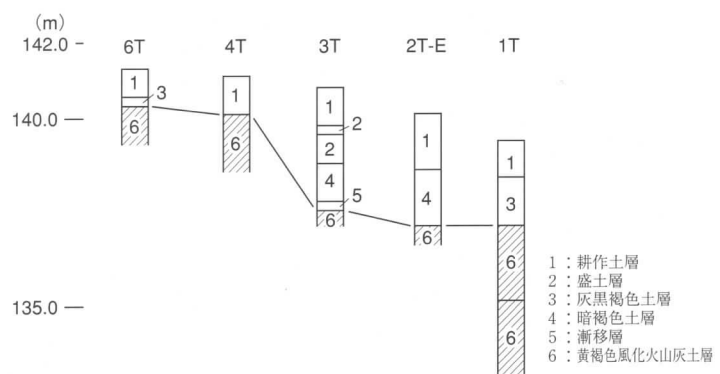
調査の結果 調査対象面積約 8,667 m² に対し、旧地形把握も視野に入れながら、6 箇所、調査面積は 56 m² のトレンチ調査を実施した。遺構・遺物は検出できなかった。部分的に黒ボク土層が残存している地点はあるものの、開発区域の大部分において黒ボク土層が削られているものと推測される。したがって、今回の開発工事は特に問題がないものと判断した。



第 34 図 調査地位置図 (1/20,000)



第 35 図 トレンチ配置図 (1/2,000)



第 36 図 土層柱状図 (1/40)

11 下ノ坪遺跡確認調査

調査地 長岡市滝谷町字下ノ坪 調査面積 72 m² (対象面積 11,200 m²)
 調査期間 平成 18 年 10 月 5 日 調査担当 駒形敏朗

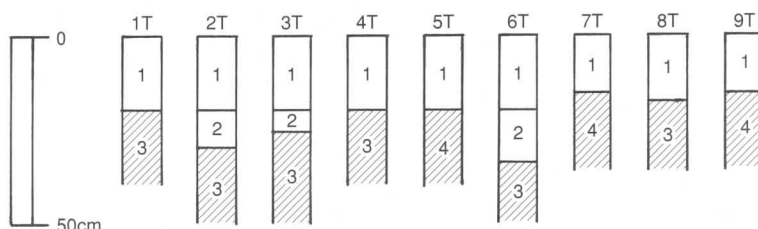
調査に至る経緯 下ノ坪遺跡を含む地域—長岡市滝谷町から渡沢町にかけての上越本線と東山丘陵との間に広がる水田を対象に、県営は場整備事業が計画された。このため、事業主体者とは場整備事業と埋蔵文化財の保護に関する協議を進め、平成 18 年度に試掘調査を行うことになった。

また、本事業地に隣接している変電所の試掘調査を平成 8 年に行った。その状況からは場整備事業計画地に遺跡が所在する可能性は低いと考えられるが、渡来銭が出土した下ノ坪遺跡を中心に試掘して、遺跡の広がりなどを確認することにした。

遺跡の概要 下ノ坪遺跡は、昭和 28 年、滝谷町の甲野精一氏が耕地整理の際に、中世の渡来銭を 3~4 升ほど掘り出した遺跡である。現存する古銭は宋通元宝 (969 年) から宣徳通宝 (1426 年) までの渡来銭 30 枚で、最新銭の宣徳通宝から 15 世紀後半以降に埋蔵された備蓄銭であろう。遺跡は、東山丘陵の西斜面の裾部で、自然堤防の脇に形成された後背低湿地に位置する。標高約 34m、現況は水田である。

調査の結果 (第 37 図~第 39 図) 発見者の甲野氏から現場で古銭出土位置の確認をしていただいた地点を中心に、発掘トレンチ (2×4m) を設定してバックホウで発掘した。その結果、各トレンチから遺構は確認されず、遺物も出土しなかった。また、15~20cm の水田耕作土の下がすぐに地山の黄褐色土もしくは青灰色粘土のところ (1・4・

5・7~9T) が多く、遺物包含層と思われる土層は認められなかった。このことから、下ノ坪遺跡は、集落もしくは屋敷跡などの遺跡ではなく、大量の古銭だけが埋納されていた可能性が高いと考えられる。



1: 耕作土 2: 暗褐色土 3: 黄褐色土 (地山)
 4: 黄褐色土+小石 (地山) 5: 青灰色粘土 (地山)

第 37 図 土層柱状図 (1/20)



第 38 図 古銭出土位置 (●) とトレンチ位置図 (1/5,000)

13 中里北地区試掘調査

調査地 長岡市小国町法坂 調査面積 666 m² (対象面積 79,200 m²)
 調査期間 平成 18 年 6 月 28 日・10 月 13 日～30 日 調査担当 池田淳子・新田康則

調査に至る経緯 県営ほ場整備事業地を対象に平成 13 年 12 月に分布調査を実施し、その結果を踏まえて、平成 14 年度以降、継続的に試掘調査を実施してきた。今年度も面工事予定地内において試掘調査を行った。なお、本年度の調査は 6 月・10 月に分けて実施しており、便宜的に前者を 1 次調査 (担当：池田)、後者を 2 次調査 (担当：新田) とする。

調査地の概要 調査地は渋海川右岸段丘 (沖積段丘) 上に位置する。現況は水田である。調査地東側の丘陵端部には城遺跡 (中世城館跡)、調査区南側の段丘面には新町上の原遺跡 (縄文) などが立地している。

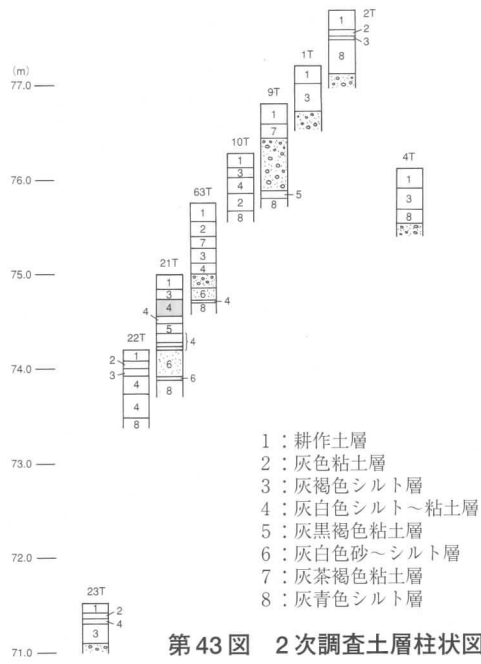
1 次調査 13 箇所 (13T) でトレンチ調査を実施した。13T で珠洲焼片 (甕) や近世漆器片が出土したほか、ほぼ全てのトレンチから近世陶磁器片が出土した。

2 次調査 63 箇所 (21T) でトレンチ調査を実施した。調査地北側で近世陶磁器片や、帰属時期不明の杭列などを検出した。また、21T からは剥片 4 点がまとめて出土した (第 42 図)。1～3 はチョコレート色の頁岩を素材とした剥片 (2 次加工のある剥片) である。現地表面から約 39～40 cm の深度から出土した。接合はしないものの、同一母岩から連続的に剥離された剥片だろう。礫打面をもち、頭部調整が残される。また、剥片背面の剥離構成からは、打面が移動しながら剥片剥離が進行していった様子が看取される。そして、1 と 3 では背面側、2 では主要剥離面側に 2 次加工や微細剥離痕が確認できる。4 は安山岩製の調整剥片である。出土位置は 1～3 よりも約 14 cm 低い。甲高で比較的調整の進んだ個体から剥離された調整剥片であろう。

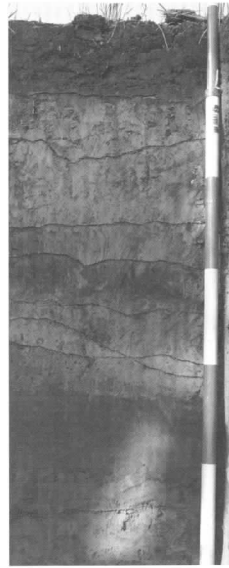
1～4 は縄文時代の所産と考えられるが、時期を特定するほどの情報を有してはいない。ただし、調整剥片の出土を積極的に評価すると、21T 付近に石器製作跡が残されている可能性がある。事業者や関係者との協議の結果、来春、気候などの調査条件が良い時期に追加調査を実施することとなった。



第 42 図 トレンチ配置図 (1/6,000) *網カケは、土層柱状図の掲載を示す



第43図 2次調査土層柱状図 (1/80)



21T



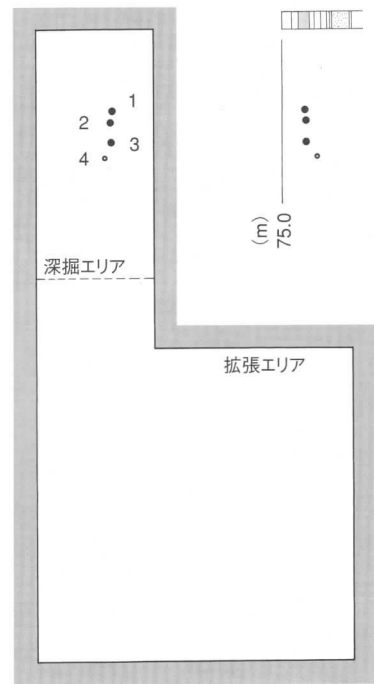
写真24 21T遺物出土状況①



写真25 21T遺物出土状況②



第44図 遺物実測図 (4/5)



第45図 21T遺物分布図 (1/120)

報告書抄録

ふりがな	へいせいじゅうはちねんどながおかしないいせきはつちようさほうこくしょ						
書名	平成18年度長岡市内遺跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	駒形敏朗・鳥居美栄・小林徳・丸山一昭・新田康則・加藤由美子						
編集機関	長岡市教育委員会						
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1						
発行年月日	2007年3月22日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
よしたけきたいせき 吉竹北遺跡	ながおかしとらどまりなつどあぎよしたけ2015ばんちほか 長岡市寺泊夏戸字吉竹2015番地ほか	152021	1265	373639 1384547	20061010 ~20061023	18.0㎡	県営ほ場整備事業
よしたけにしいせき 吉竹西遺跡	ながおかしとらどまりなつどあぎよしたけ2502ばんちほか 長岡市寺泊夏戸字吉竹2502番地ほか	152021	1034	373637 1384538	20061010 ~20061023	12.0㎡	県営ほ場整備事業
かこいらちいせき 囲内遺跡	ながおかしせりかまちあざかこいらち 長岡市芹川町字囲内	152021	223	372941 1384934	20061112 ~20061121	20.2㎡	市道改良工事
めくらたいせき 盲田遺跡	ながおかしとみじまちあざめくらだ 長岡市富島町字盲田	152021	608	372837 1385322	20061012 ~20061013	56.0㎡	県営ほ場整備事業
ごひやつかのりいせき 五百刈遺跡	ながおかしせりかまちあざごひやつかのり 長岡市富島町字五百刈	152021	609	372834 1385342	20061013 ~20061018	320.0㎡	県営ほ場整備事業
あきだいいせき 浅田遺跡	ながおかしとみじまちあざあきだ 長岡市富島町字浅田	152021	607	372823 1385346	20061017 ~20061018	42.0㎡	県営ほ場整備事業
ふるむらいせき 古村遺跡	ながおかしとみじまちあざふるむら 長岡市富島町字古村	152021	606	372826 1385324	20061018 ~20061019	216.0㎡	県営ほ場整備事業
えのきまちいせき 榎町遺跡	ながおかしみやしたまちあざえのきまち 長岡市宮下町字榎町	152021	605	372817 1385332	20061018 ~20061018	80.0㎡	県営ほ場整備事業
くずれいせき 崩遺跡	ながおかしかなざわあざくずれ 長岡市金沢字崩	152021	642	372845 1380001	20060705 ~20060705	16.5㎡	市道建設工事
とちおやかたあと 枳尾館跡	ながおかしとちおのおのまちあざしろくぼ 長岡市枳尾大野町字城久保	152021	706	372807 1385921	20060705 ~20060705	2.0㎡	携帯電話通信用鉄塔建設
うえのはらでいせき 上ノ原D遺跡	ながおかしとちおのおのまちあざうえのはら1313ばんちほか 長岡市大川戸字上ノ原1313番地ほか	152021	698	372700 1390059	20060517 ~20060517	24.2㎡	携帯電話通信用鉄塔建設
しものつぼいせき 下ノ坪遺跡	ながおかしとみじまちあざしものつぼ1659ばんちほか 長岡市滝谷町字下ノ坪1659番地ほか	152021	294	372153 1385026	20061005 ~20061005	72㎡	県営ほ場整備事業
ふりがな 所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
よしたけきたいせき 吉竹北遺跡	遺物包蔵地	平安	柱穴	土師器・須恵器			
よしたけにしいせき 吉竹西遺跡	遺物包蔵地	平安	なし	土師器・須恵器			
かこいらちいせき 囲内遺跡	遺物包含地	古代・中世	なし	なし			
めくらたいせき 盲田遺跡	遺物包含地	平安	なし	なし			
ごひやつかのりいせき 五百刈遺跡	遺物包含地	平安	なし	土師器・須恵器			
あきだいいせき 浅田遺跡	遺物包含地	弥生	なし	なし			
ふるむらいせき 古村遺跡	遺物包含地	平安	なし	須恵器			
えのきまちいせき 榎町遺跡	遺物包含地	平安	溝	土師器			
くずれいせき 崩遺跡	遺物包含地	縄文	なし	なし			
とちおやかたあと 枳尾館跡	城館跡	中世	なし	なし			
うえのはらでいせき 上ノ原D遺跡	遺物散布地	縄文	土坑	縄文土器			
しものつぼいせき 下ノ坪遺跡	古銭出土地	中世	なし	なし			

平成18年度 長岡市内遺跡発掘調査報告書

平成19(2007)年3月22日 印刷

平成19(2007)年3月22日 発行

発行 新潟県長岡市教育委員会

印刷 株式会社サンワプロセス